

四大公害病の一つ、イタイイタイ病（イ病）の患者や遺族らが原因企業の三井金属鉱業を訴えた訴訟で、公害訴訟として日本初の「原告勝訴」判決から2021年で半世紀が過ぎた。同時に住民側による神岡鉱山（岐阜県飛騨市）への立ち入り調査も50回となった。最初から調査に加わる日本環境学会元会長、畑明郎さん（滋賀県）がこの50年の成果をまとめた「イタイイタイ病発生源対策50年史」が本の泉社）が同年9月に刊行。イ病を語り継ぐ会主催の市民塾でもリモートで講演し、現状と課題を解説した。【青山郁子】

イ病 原告勝訴50年

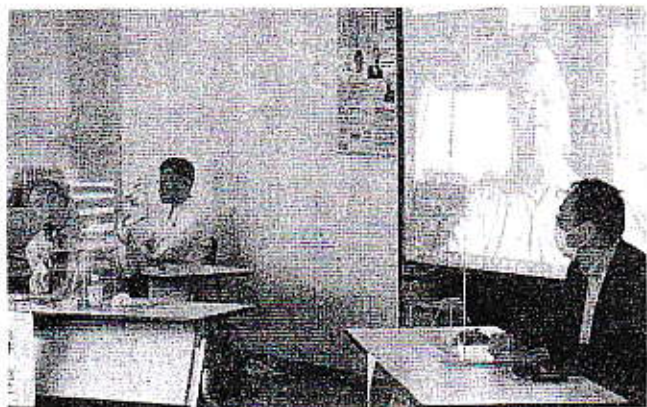
立ち入り調査とは、▽カドミウムなどの収量の1に削減され、神通川の五つのテーマ川水系のカドミウム濃度は約20分の1と自然学に委託。畑さんは排煙レベルに戻った。その

残る廃滓 終わらぬ浄化

水分野を担当し、コ罗纳禍で神岡入りできなかった20、21年以外は毎年調査に参加。94年には「イタイイタイ病発生源対策22年のあゆみ」を出版した。地下に眠る80トのカドミウム

企業側の努力もあり現在、神岡鉱山から神通川に排出するカドミウムは、72年の約16分の

記者レポート



神岡鉱山の現状と課題をリモートで解説する畑明郎さん（富山市湊入船町の泉民共生センターサンフォルテで2021年9月）



神岡鉱山の廃滓堆積場（岐阜県飛騨市で2021年11月、本社へリから久保玲撮影）

でも畑さんは、問題がなくなったわけではなく指摘する。亜鉛電解工場の地下作業は続いている。また36年、45年、56

が、約100年を要するとの見方もあり、過去の操業の後処理は注視しなければならぬ。行政の監視が不可欠。神岡鉱山には鹿間谷、和佐保谷、増谷の三つの廃滓堆積場があり、谷を利用したダムに泥状の廃滓が大量に蓄積されている。その量は、最大の和佐保谷で東京ドーム21個分。畑さんは、3カ所の堆積場に含まれるカドミウムは約5000トと推定する。95年の阪神大震災を受けて、増谷、和佐保谷の安全性を確認した結果、震度7クラスの巨大地震でも安全だと判定された。しかし和佐保谷の上部は、「土砂災害特別警戒地域」に指定され、2000年以降の主な地震を考慮すると、絶対安全とは言えないと指摘する。

年、全国各地でかつてない集中豪雨被害が相次いでおり、巨大地震や豪雨災害への対策が不足していると指摘する。そのうえで畑さんは「監視は永遠に続くものであり、一企業の対策では限界がある。今後は行政による監視が必要だ」と主張した。